

マルティン・グルツイメク 『トリスタン 誠と愛と裏切りの物語』

Martin Grzimek „Tristan. Roman um Treue, Liebe und Verrat“.

Hanser Verlag, 2012

『愛の媚薬』の場面の試訳(996頁以下)

トリスタンは再びデッキの縁へ行った。既に、彼らがそれを目指して進んでいた陸を見ることが出来た。水先案内人の情報によれば、彼らは進路から大きく逸れて、他の船は視界から見えなくなり、彼らの旅が丸二日遅れてしまったことを覚悟しなければならなかった。上陸はどうしても必要で、エルイスの幾人かの男爵達の気分は大層惨憺たるものだったので、彼らはどうしても数時間陸で過ごさなければならなかった。トリスタンはまたそれを女性達にも勧めた。

イゾルデは彼らがはげた岩壁の間に着いた後で、船を去ることを拒んだ。その後ろには二、三のあばら屋があり、その中で漁師がその家族とともに住んでいた。石だらけの浜辺の上に男爵達のために、彼らが陣屋を張ることのできる場所が用意された。火が起こされ、マトンが焼かれ、ワインが配られた。ブランゲーンもまた、その足を再びしっかりとした大地に置くことが出来るのを喜んだ。彼女は陸からイゾルデへ手を振った。

ブランゲーンは、船のもう一方の端に座り、何かを手を持っているトリスタンに気付いたが、それが何かを見分けることは出来なかった。侍女(ブランゲーン)は船の渡しを渡り終えて、歩いていく間に背後で浜の砂利が彼女の足許で軋むのを聞いて、かすかな不安を胸の裡に覚えた。彼女は王女を独りにしていくことはよろしくないと考えた。その時彼女は卿の一人から名を呼ばれ、一緒のお食事でもいかかと勧められた。彼女は既に何日も前からまともなものを碌に食べていなかったで、この申し出に喜んで従った。イゾルデは遠くから、ブランゲーンが急に踵を返す様を見て、束の間の不安を覚えたが、しかしすぐにこの見知らぬ土地での停滞を喜んだ。というのもそれは彼女が妻にならなければならない、見知らぬイギリスの王との出会いの前の僅

かな猶予を意味していたからである。そのことを考えるだけで彼女はぞっとするのだった。

思案にくれて彼女がふり返ると、タントリスが、否、トリスタンがいた。もし彼が彼女に今とにかく彼の詩の一節を演奏出来たならばよかったのだが、彼女は楽器を船の上のどこにも見つけられなかった。彼女は彼に向かって船尾の方へ歩み、彼に頼んだ。「私に何か歌ってくれないかしら。そうすれば私達は少し時間を潰すことが出来るでしょう。」

トリスタンはこの申し出を聞いた時、彼の胸の鼓動を感じた。彼は憂いに満ちて、未だエルイスの岸辺の何処かの物置小屋に隠してきた堅琴を思い出した。「歌を、そうですね」彼は控えめに言った。「それをあなたにたしかに歌うことは出来ません。ただ残念なことに楽器を持ちあわせておりません。もしよければあなたが私の楽器となってくださいませんか。」

「それはどのように」イゾルデは驚いた。

「お待ちください」トリスタンは辺りを見回し、桶を見つけ、底を上に向けて彼の足の間に挟み込んだ。そしてリズムを叩き始めた。

「このようにお出来になるでしょう」彼は言い、ムーア人のところで彼がそれを見聞きしたように、さらに叩いた。「やってみてください」彼はイゾルデに桶を差し出した。雨が降り始め、彼らはデッキの下のイゾルデの船室へ向かった。そこではちやうど、王妃が彼女の娘に下女として委ねていたエルヴァが寝床を整えていた。

「エルヴァ」、王女であるイゾルデは言った。「私達のことはどうぞお構いなく。私達は、他の人達が陸にいる間に、何か歌いたいのです。タントリス、何か言って頂戴」

「私はトリスタンです」彼は言った。

「あら、失礼しました」イゾルデは赤くなり、再び彼女が騎士と向かい合って座っていることをはっきりと自覚したのであった。

「あなたが御座します限り」そこでトリスタンは微笑みながら言った。「あなたは私をずっとタントリスとお呼びになることも出来まし

よう——それでは、始めましょう。あなたは太鼓をお打ちになつてく  
ださい」

——タンタタタ——私がイゾルデを見た時、彼女は誰よりも美しい人  
だった

——タタタタタタタン——可愛らしい

——タタタン——髪は金色で

——タタタン——誰よりも美しかった

——タタタタタタタン！

エルヴァは引き続きそばに控えて、このイゾルデとトリスタンの間  
の、初めはぎこちなく、それから段々としつかり桶の底を叩くように  
なつた美しい掛け合いを聞いていた。そして彼、殿方は優美な声音で  
彼女の女主人に歌い、常に新しい詩行と韻を見出し、その中で彼女と  
ともに歩んでいた。「森の中で」そこで「彼女は寒気を覚え」そこで

「彼は彼女を温め」ついには「ドラゴンが炎を吐いた。」

彼がこう歌つた時、二人は笑わずにはいられなかった。

「このデッキの下でも暑くなつてきましたし、歌うと喉が渇きま  
す。」イゾルデはこう言つて、ちようと部屋を後にしようとしていた  
エルヴァに頼み事をした。「なにか飲むものはないかしら。」

「籠の中にお姫様の母上の小瓶があります」とエルヴァは言つて、  
膝を屈めてお辞儀をした。

「それでは開けて頂戴！」イゾルデは興奮していた。その歌にかま  
けるあまり完全に時間を忘れた。船はすぐにまた広々とした海に向か  
わねばならず、足元の床は揺れ、しかしそれでも彼女はそのことをど  
うとも思わなかった。厳格な脚韻で終わるこのナンセンスな詩句をト  
リスタンとともに歌うことはとても陽気なことであったが、その一方  
で彼女の一生のすべてが混乱していた。彼女はブリテン島の浜のどこ  
かにいて、誰とも知らない王と結婚させられ、二つ名をもつ吟遊詩人  
と一緒に座っていた。その詩人は騎士であつて、一瞬前にはいまだ切  
羽詰まつて船を暴風から浜へ操舵して、突如として脚韻を踏んで「海  
より憎いものはない」と言い切つた。「海よりもーものはない」と。

イズルデは、彼女が言葉を歌の中で切り離したりまた接ぎ合わせたりして、歓声を上げた。

「いますぐに私達にお母さまの調査したお酒を下さいな」彼女はエルヴァに行った。「赤いイチゴのお酒でしょう？ちよつぱり毒もはいつているけれど。」笑いながら彼女は侍女の手から小瓶を取った。

「待って！待って下さい！」トリスタンは懇願しながら呼び止めた。「少しの間お待ちください。すぐ戻ります。」

トリスタンは何か大切なものを忘れた若者のようにそこから走り去った。彼が戻ってくるまでに少しばかりの時間があつた。その間イズルデは容器の首元の臭いを嗅いだ。甘い匂いが彼女の鼻に立ち込めた。「お母さまったら！」思い出し笑いをした。「あの方は一体この壺液の中に何を入れたの？ラベンダーの香りがしてアブラナ、スイバ、もちろん蜂蜜、そして―ヌムヒアかしら？」彼女は独りごとを言った。そしてトリスタンがすぐに彼女のそばへ戻った。「お妃さまのおつしやるヌムヒアとは何でしょうか？」なぜなら彼が理解できたのは最後の言葉だけだったからだ。

「お母さまのことを考えなければならなかつたのです。それだけです。」

イズルデは軽く受け流して、小瓶をトリスタンに見せた。彼はまたしても彼の背後からコロナ製のグラスを取り出した。グラスは彼が長年持ち歩いていたものである。「これはあなたのヌムヒアにふさわしい器です。」彼はそう言つて、グラスをイズルデへ差し出した。

イズルデはそれを彼女の空いているほうの手で受け取つた。「どこから手に入れたのですか？」彼女は感嘆しきつて尋ねた。「これより美しいものは見たことがありません。」

「めつたにお目にかかれない逸品です。」トリスタンは声を潜めて言つた。二人は互いの目を見つめ合つた。まるで盲いた目が見つめるかのように。

トリスタンはわれに返つた。「注いで下さい！」彼は感じた至福にほとんどこらえきれなくなつて、イズルデに促した。「先にお飲み下

さい。その次は私です。」

ことは起こった。

彼らは飲み、互いの目をもう一度見つめあい、もう目を逸らすことができなくなった。侍女エルヴァはなんだか変な雰囲気になったので、その親密な空間を後にした。彼女が階段を上っていたとき、二人が一つの歌を声を合わせて歌い始めたのを聞いた。エルヴァはまだデッキに上がりきらない所で、主人ブランゲーネに会った。

「一体下で何をやっているのか。」彼女は尋ねる。

「歌をお歌いです。」エルヴァは言う。

「彼らはきついワインでも飲んだの？」

「違います。お二人に女王さまが調合なさった果実酒を差し上げただです。」

「緑の瓶の？」

「お二人が望まれたものでございます。」

「お前は二人に渡したのか？」

「他にありますでしたから。」

ブランゲーネは理解できないといったふうに見つめた。そして彼女の顔を叩いた。エルヴァは泣き出した。自分がいったい何の悪いことをしたのかわからず、ぼんやりとつぶやいた。デッキへ上がるためにブランゲーネの前を小さくなってすり抜けた。そこへ達する前に、船頭に出会った。彼はちょうど彼の乗組員を出航のために呼び集めるところだったので、侍女に下に戻るようにいった。「ここじやあお前はお呼びじゃないよ！」と彼女を怒鳴りつけた。エルヴァは驚いて、濡れた梯子を踏み外し、バランスを失って、横木を滑り落ちた。彼女がようやくやくロープをしっかりと掴むことができた時、彼女は体中の関節を痛めたことに気づいた。同時に彼女は見た。ブランゲーネが片手にグラスをもって、トリストアンとイズルデを甲高い声で説得していたのを。これはお二人の生とお二人の死、お二人の始まりとお二人の終わりなのですよ！ブランゲーネは怒りに身を任せてまくし立て、激怒して床へグラスを叩きつけたので、グラスは粉々に砕け散

った。

エルヴァは梯子の終わりの暗い隅っこに引っこみ、両足をだいて、できるだけ小さく身を縮めた。彼女は、自分がいるところをいたくなくかつたし、どこにもいたくなかつた。ブランゲーネが取り乱して、混乱したように喚き、怒りに満ちて話し始めると、エルヴァは手で耳を覆った。エルヴァは、ブランゲーネが、それと知りながら裸足の足を木の床の上のガラスの破片の中へ踏み入れるのを目にし、そして傷口から血が滲み出てくるのを目にした。トリスタンとイゾルデは、自虐行為はやめてくれと頼んだ。二人はブランゲーネを落ち着かせるために、座っていた寝床から立ち上がった。トリスタンは彼女の足を布で巻くために、シャツを脱いだ。

その小さな部屋は、ブランゲーネの悲鳴や金切り声で満たされていた。エルヴァは、自分にすべての責任があることを知っていた。しかし、彼女には、彼女の罪の所在はわからなかつた。そうであるから、ブランゲーネ、トリスタン、イゾルデが言い争いを始めると、彼女はさらに深く自分の隠れている場所に引っこんでしまい、さらに多くの恥を感じたのだった。

「この小瓶は、マルケとイゾルデのためのものと定められていたのです！」とブランゲーネは叫んだ。

「どうやって私たちにそれがわかつたというのです？」とイゾルデは言った。

「それは愛の媚薬なのです！」

ブランゲーネは泣き出さんばかりだった。

「愛の媚薬、だって？」

トリスタンは、二人の女を落ち着かせようとした。彼の声は興奮してはいなかつた。彼は尋ねた。

「それが何であるか、その答えが、愛の媚薬だというのか？」

その時ブランゲーネはほとんど自暴自棄になり、礼を失した呼びかけをしてしまった。

「愛の媚薬ですって？ 一体あなた、イゾルデ、私たちのお方様、まだ

それをずっとちゃんとわかっていなかったの?」

彼女はうめいた。

「けれども、今から、あなたたちは二人とも、愛の媚薬の効果を知るようになるわ。愛の媚薬は、あなたたちを毒してしまったのよ。それどころか、あなたたち、ちよつと見つめあつてごらんさいよ。あなたたちは死ぬまでお互いの虜になってしまふでしょうよ。この愚かな侍女のおかげで―彼女はどこ?あの子を打ち殺してしまいたいくらいだわ。あなたがたは:」

ブランゲーネはこれ以上自制できず、泣き出したのだった。彼女のむせび泣きはあまりにも激しかったので、彼女の体はそれによつて打ち震え、エルヴァは、純粹な同情心によつて自分の隠れ家から這い出たい氣になった。イズルデはブランゲーネの上にかがみこみ、彼女に向かつて囁きかけた。

「あなたが私に言いたいことは、一体何なの?」

「私があなたさまに何を申し上げたいかですつて?」

ブランゲーネの言葉は、むせび泣きのあまり、ひずんでいた。

「私があなたさまに申し上げたいのは、お二人は、今からは、誰もが熱望し、そして誰も耐えることのできないことを経験なさるだろうということなのです。それは―いいえ、私にはできませんわ。」

彼女は再びむせび泣いた。

「お二人は、それをご自身の身でお知りになるでしょう。」

と、彼女はか細くなつていく声で言った。

「ありえないようなことを!」

「母なる大地に、全能の太陽に、キリストにかけて、私たちにどうか最後に言つておくれ、私たちが持っているのは何なのか、ありえないものとは何なのか!それは病氣なの?」

これ以上嘆願するように話すことは、イズルデにはできなかった。彼女はブランゲーネの前に跪き、自分のスカートの裾を顔に押し当てていた。

「それはもつとひどいことなのです!永遠の愛、ずっと:お二人が死

ぬまで続く、お互いへの恋、それこそ、お二人が突き進んでいくことになる運命なのです！」

イゾルデは驚愕した。幸福のあまり打ち震え、涙を頬に伝わせながら、彼女は、顔を背けてかすかな声で一人嘆きに沈むブランゲーネを見つめた。ついに、彼女は視線を、侍女がうずくまり体全体を震わせている隅っこの方に向けた。

「エルヴァ」

イゾルデは慎重に言った。

「隅から出て、こちらへ来なさい。私たちはあなたに何もしないから。私たちが望まなかったことに対して、あなたは何も賛成できないし、何もしなかったのよ！」

この瞬間、ブランゲーネは叫びだした。

「彼女はどこなの？彼女をどこかへやってしまつて！私が彼女を海に投げ入れるか、打ち殺してしまうわ！」

「手をだしてはいけません！」

イゾルデは突然自制心を取り戻して言った。

「もしここに謝罪に値する者がいるならば、それは私、あなたの未来の王妃なのです！」

彼女は身をかがめ、エルヴァのところまで這っていき、彼女の手を取り、完全にうろたえた侍女を隠れ家から引つ張り出した。

「船の上階へ行きなさい。」と、彼女は静かに言った。

「何か飲みものや食べ物を自分で用意なさい。それは私の命令だと言いなさい。もう泣かないで、そのあとで、また私たちのところに来なさい。それというのも、私にはあなたにやつてほしいことがあるからなのです。さあ、お行き！」

エルヴァは梯子の階段を上り、なおも、ブランゲーネとイゾルデがさらにお互いに言い争っているのを耳にした。改めて彼女の名前も出てきていたが、その時には彼女は船の上階におり、昇降口を閉めてしまった。湿った、穏やかな風が、彼女の周りを吹き渡った。風は強かったが、もはや嵐のように猛烈ではなく、ボートは出航し、船旅は続



けられた。彼女は、イゾルデが命じたように食事をする気にはなれず、喉の渇きも感じなかった。彼女は不安で、未だに全身を震わせ、ある打ち捨てられた場所に潜り込み、そこに身を隠した。そのあとで、彼女は誰かが自分の名を呼ぶのを聞いた。それはブランゲーネの声だった。

「エルヴァ？そこにいるの？もう何か食べものをもらったの？」

エルヴァは息を殺した。夜になり、真つ暗であった。船は波間を滑るように進み、船の動きは安定していた。ただ帆のはためきだけが聞こえ、時々、大きなシートがびんつと引っ張られたような、打ち据えるような音がした。エルヴァは目を閉じた。彼女はとても疲れており、眠りたかった。

(訳…山崎拓人、宮下寛司、宮下みなみ)